



2021年度 第2回 太平洋いわし類・マアジ・さば類長期漁海況予報

— 別表の水産関係機関が検討し国立研究開発法人水産研究・教育機構
水産資源研究所がとりまとめた結果 —

今後の見通し(2022年1月~6月)のポイント

海況

黒潮はA型^(※1)基調で推移する。

沿岸水温は、潮岬以西は「極めて低め」^(※2)～「平年並」^(※2)。熊野灘～遠州灘は「平年並」～「高め」^(※2)、駿河湾～相模湾は「やや低め」^(※2)～「平年並」で、暖水波及時に「極めて高め」^(※2)、伊豆諸島海域は「平年並」～「高め」。房総～常磐南部海域は「平年並」～「やや高め」^(※2)で推移する。

※1 黒潮を遠州灘沖から伊豆諸島周辺海域の流路で分類する

A型：流路南端が北緯32度以南

※2 平年並=平年値±0.5℃程度、(やや高め、やや低め)=平年値±1.0℃程度、
高め=平年値+1.5℃程度、(極めて高め、極めて低め)=平年値±2.5℃以上。

ただし、鹿島灘～常磐南部海域の基準は次頁末尾を参照のこと。

漁況(来遊量予測)

マイワシ

房総以北では前年並、相模湾以西では前年並～下回る。

カタクチイワシ

引き続き低水準で、全体としては前年並。

ウルメイワシ

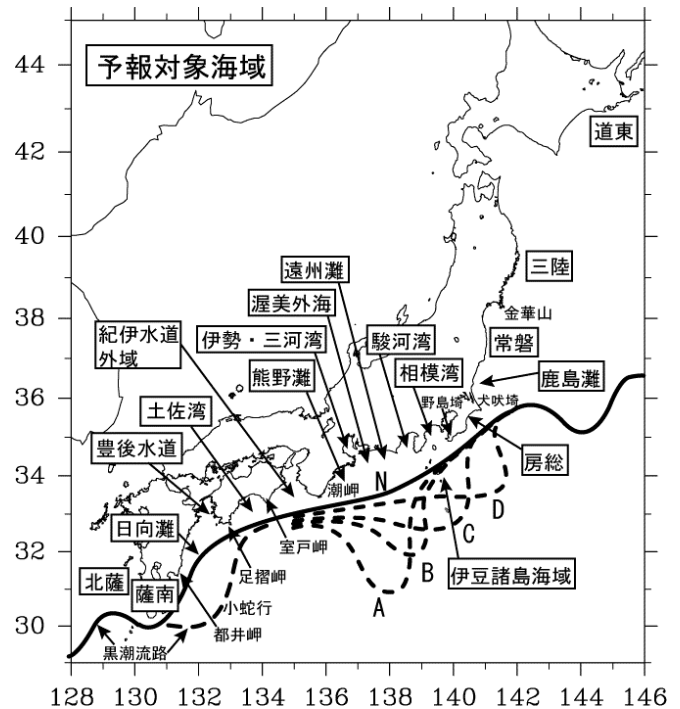
全体として前年並。

マアジ

海域により異なるが、全体としては前年並。

マサバ・ゴマサバ

マサバは前年並。ゴマサバは低水準。



問い合わせ先

国立研究開発法人 水産研究・教育機構

担当 企画調整部門(横浜) 森永

漁況：浮魚資源部(横浜) 福若、由上、古市、安田、木下、渡邊

海況：海洋環境部(横浜) 市川、安倍

電話：045-788-7615、ファックス：045-788-5001

当資料のホームページ掲載先URL

<http://www.fra.affrc.go.jp/pressrelease>

中央ブロック海況予報

今後の見通し（2022年1月～6月）

(1) 黒潮（注：黒潮流型は図1を参照のこと）

◎潮岬以西

- ・都井岬～足摺岬沖では、概ね離岸傾向で推移するものの、一時的に接岸することがある。
- ・室戸岬～潮岬沖では、離岸傾向で推移する。

◎潮岬以東

- ・大蛇行が継続し、A型基調で推移する。
- ・伊豆諸島海域の西側を北上し、一時的に熊野灘に接近することがある。
- ・房総沖では、接岸傾向で推移するものの、一時的に離岸することがある。

(2) 薩南～房総海域

- ・都井岬～足摺岬沖では、概ね冷水域に覆われるものの、一時的に暖水が波及することがある。
- ・室戸岬～潮岬沖では、冷水域に覆われる傾向で推移する。
- ・熊野灘～遠州灘～相模湾には、黒潮の蛇行北上部から暖水が波及することが多い。
- ・伊豆諸島海域は、概ね暖水域に覆われる。
- ・房総沖では、黒潮から暖水が波及しやすいものの、一時的に沿岸水が分布することがある。

(3) 鹿島灘～常磐南部海域

- ・黒潮から暖水が波及しやすいものの、一時的に沿岸水が分布することがある。

(4) 沿岸水温

- ・潮岬以西では、「極めて低め」～「平年並」で推移する。
- ・熊野灘～遠州灘は、「平年並」～「高め」で推移し、暖水波及時には「極めて高め」となることがある。
- ・駿河湾～相模湾は、「やや低め」～「平年並」で推移し、暖水波及時には「極めて高め」となることがある。
- ・伊豆諸島海域は、「平年並」～「高め」で推移する。
- ・房総～常磐南部海域は、「平年並」～「やや高め」で推移する。

※ 平年並＝平年値±0.5℃程度、（やや高め、やや低め）＝平年値±1.0℃程度、
（高め、低め）＝平年値±1.5℃程度、（極めて高め、極めて低め）＝平年値±2.5℃以上
（鹿島灘～常磐南部海域では、平年並＝平年値±1.5℃程度、（やや高め、やや低め）＝平年値±1.5～4℃程度、
（高め、低め）＝平年値±4～6℃程度、（極めて高め、極めて低め）＝平年値±6℃以上）

プレスリリース

黒潮はA型基調で推移する。沿岸水温は、潮岬以西は「極めて低め」～「平年並」。熊野灘～遠州灘は「平年並」～「高め」、駿河湾～相模湾は「やや低め」～「平年並」で、暖水波及時に「極めて高め」。伊豆諸島海域は「平年並」～「高め」。房総～常磐南部海域は「平年並」～「やや高め」で推移する。

経過（2021年7月～12月）（注：経過は図2を参照のこと）

（1）黒潮

- ・ A型流路の大蛇行が持続した。
- ・ 11月上旬以降、大蛇行部が西に移動したことに伴い、足摺岬～室戸岬沖で大きく離岸し、北上部が熊野灘に近づいた。
- ・ 伊豆諸島海域の西側を北上し、石廊崎沖～御蔵島付近を通過する流路をとることが多く、7月下旬～10月上旬に石廊崎へ繰り返し接近した。
- ・ 房総沖では、8月に一時的に離岸したものの、概ね接岸傾向で推移した。

（2）薩南～房総海域

◎薩南海域

- ・ 黒潮北縁の月平均位置は、7月は接岸、8月は屋久島南付近の平均的な位置、9月以降は接岸で推移した。

◎潮岬以西

- ・ 都井岬沖では、期間を通して概ね接岸傾向で推移した。
- ・ 足摺岬沖では、7月上旬～9月中旬に「接岸」～「やや離岸」で、9月下旬～10月中旬に「接岸」で推移した後、11月上旬以降は「かなり離岸」～「著しく離岸」で推移した。
- ・ 室戸岬沖では、7月上旬は「やや離岸」であったが、7月中旬～12月は「かなり離岸」～「著しく離岸」で推移した。
- ・ 潮岬沖では、黒潮大蛇行に伴い概ね「著しく離岸」で推移した。
- ・ 紀伊水道外域では、黒潮北縁から暖水が繰り返し波及した。

◎潮岬以東

- ・ 7月～8月上旬、9月～10月中旬、黒潮内側逆流が形成され、熊野灘～遠州灘にかけて暖水波及がみられた。
- ・ 8月中旬～下旬にかけて、熊野灘～遠州灘沿岸は降雨や沿岸湧昇により一時的に低温化した。
- ・ 期間を通じて、黒潮の蛇行北上部から、遠州灘、駿河湾および大島西水道へ断続的に暖水が波及した。
- ・ 11月下旬～12月、蛇行北上部の西偏に伴い、暖水の影響が熊野灘まで及んだ。・ 房総沖では、8月を除いて黒潮接岸による暖水波及の影響がみられた。

（3）鹿島灘～常磐南部海域

- ・ 期間を通じて黒潮からの暖水波及の影響がみられることが多かった。

現況 (2021年12月20日現在)

(1) 黒潮

- ・ A型流路であり、大蛇行が継続している。
- ・ 足摺岬沖から大きく離岸した後、大王埼沖で 30° N以南まで南下し、大王埼に向かってS字状に北上した後、御前埼～石廊埼沖を通過し、御蔵島付近から北東へ流れている。

(2) 薩南～房総海域

◎潮岬以西

- ・ 黒潮は、都井岬で「やや離岸」し、足摺岬～潮岬沖で「著しく離岸」している。

◎潮岬以東

- ・ 熊野灘～石廊埼沖に黒潮が近づき、沿岸付近まで黒潮系暖水がみられる。
- ・ 伊豆諸島南部海域は、暖水域に覆われている。
- ・ 房総沖では、沖合域に黒潮系暖水が波及している。

(3) 鹿島灘～常磐南部海域

- ・ 沖合域を黒潮が北へ流れている。

※ 黒潮の離接岸に関する語句表記は、川合英夫(1972)：海洋物理Ⅱ、東海大学出版会に準じた。

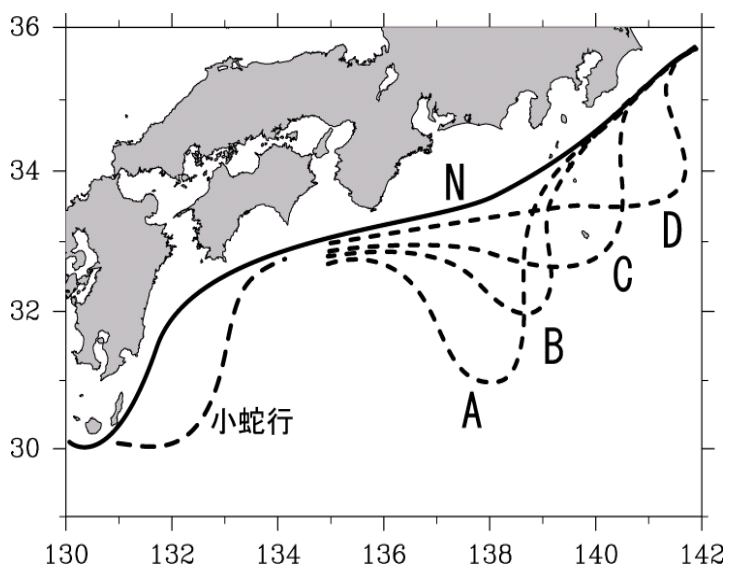


図1 黒潮流型の分類

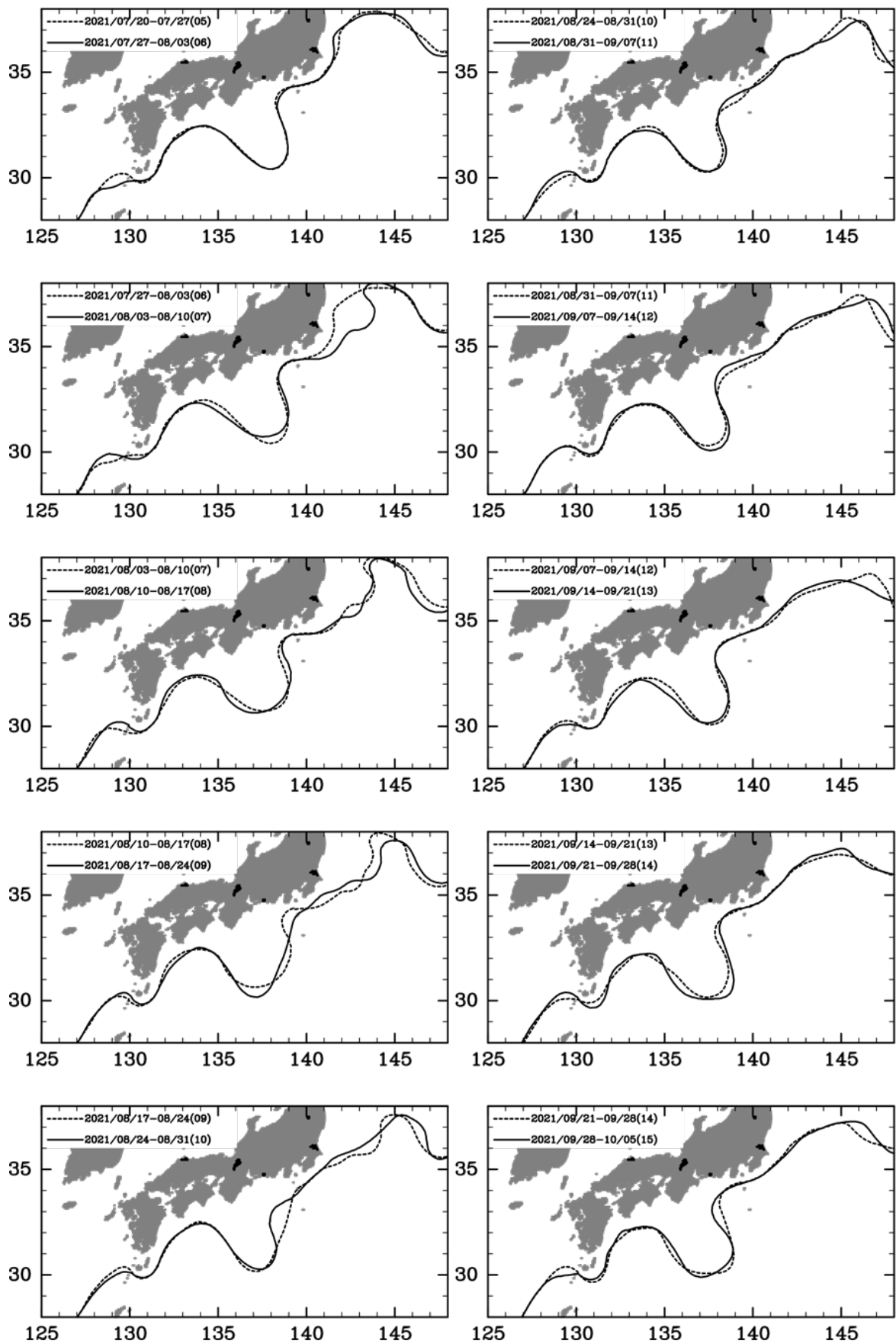


図2 黒潮流軸のパターン

(2021年7月~10月、海上保安庁海洋情報部海洋速報より作成)

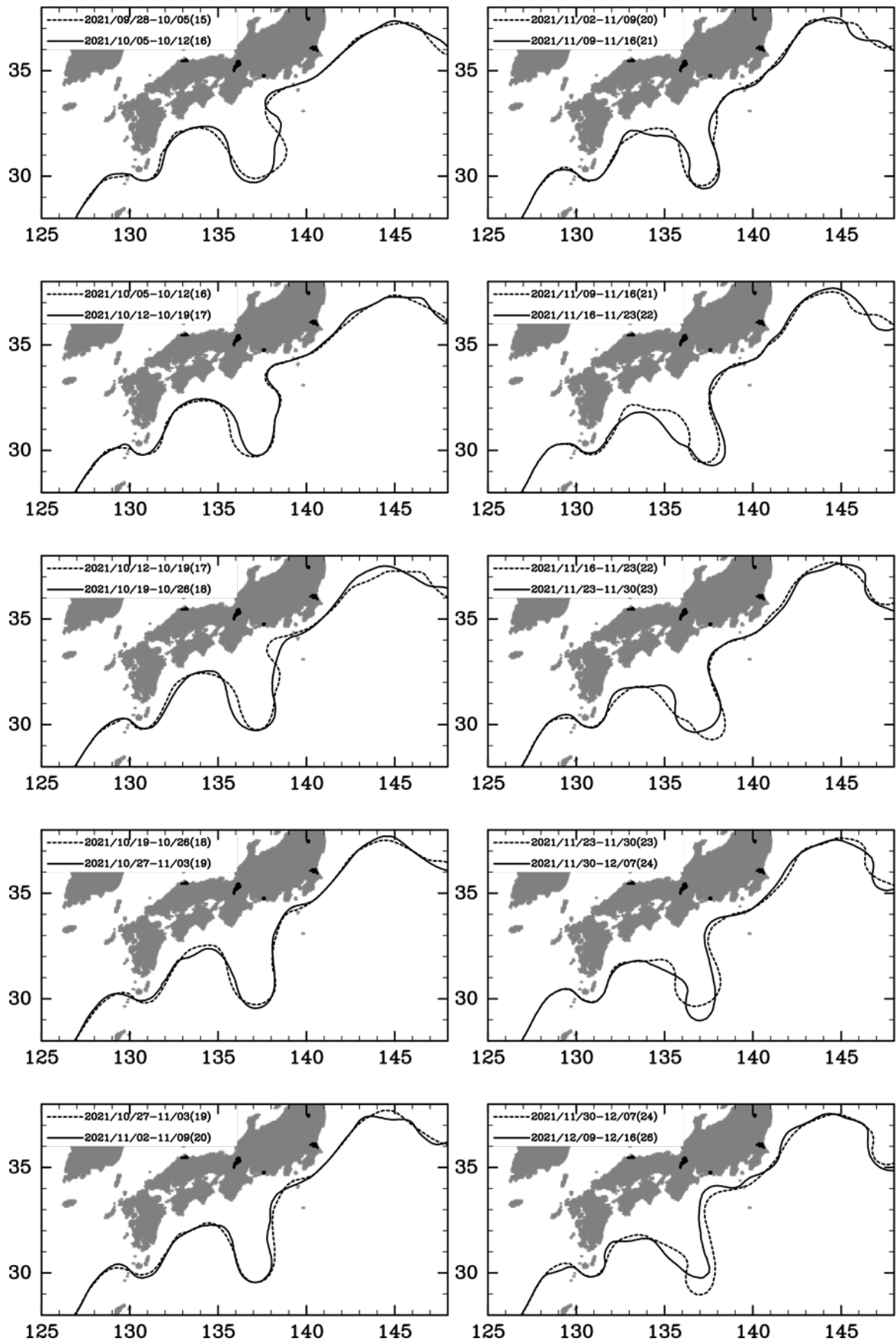


図2 (つづき) 黒潮流軸のパターン

(2021年10月~12月、海上保安庁海洋情報部海洋速報より作成)

マイワシ太平洋系群等の漁況予報

今後の見通し (2022年1月～6月)

対象海域：北薩～三陸海域、道東海域

対象漁業：まき網、定置網、船曳網

対象魚群：0歳魚(2022年級群)、1歳魚(2021年級群)、2歳魚(2020年級群)、3歳魚(2019年級群)、4歳魚(2018年級群)。年初に加齢。魚体は被鱗体長。

1. 北薩～熊野灘(まき網、定置網)

(1) 来遊量：北薩～豊後水道南部では前年を下回る。宿毛湾、土佐湾では前年並～下回る。紀伊水道外域では前年並。熊野灘では前年並～上回る。

(2) 漁期：期を通じて漁獲される。

(3) 魚体：北薩～豊後水道南部西側では、期前半は15cm～20cm前後(1歳以上)、期後半は7cm～12cm前後(0歳魚)主体。豊後水道南部東側では、5cm～10cm前後(0歳魚)主体。宿毛湾～紀伊水道外域では、14cm未満(0歳魚)および14cm以上(1歳以上)が漁獲される。熊野灘では14cm以上(1歳以上)主体。

2. 伊勢・三河湾～相模湾(まき網、定置網、船曳網)

(1) 来遊量：伊勢・三河湾～相模湾西部では前年並。相模湾東部では前年を下回る。

(2) 漁期：伊勢・三河湾では6月以降。渥美外海、駿河湾、相模湾では期を通じて漁獲される。

(3) 魚体：伊勢・三河湾、渥美外海では12cm以下(0歳魚)主体。駿河湾、相模湾西部では、期前半は13cm～15cm前後(1歳魚)および16cm～18cm前後(2歳魚)主体、期後半は12cm以下(0歳魚)主体。相模湾東部では13cm～15cm前後(1歳魚)主体。

3. 房総～三陸海域、道東海域(まき網、定置網)

(1) 来遊量：前年並。

(2) 漁期・漁場：まき網の漁場は、1月～6月は犬吠埼沖～常磐海域で断続的に形成され、6月以降は三陸海域、6月下旬には道東海域でも形成される。定置網は、仙台湾～三陸南部海域において、期を通じて入網がみられる。

(3) 魚体：10cm～15cm前後(1歳魚)、14cm～17cm前後(2歳魚)、16cm～19cm前後(3歳魚)、17cm以上(4歳魚)。

漁況の経過(2021年7月～11月)および見通し(2022年1月～6月)についての説明

1. 資源状態

マイワシ太平洋系群の資源量は、1980年代は1,000万トン以上の高い水準で推移したが、1990年代に入って急減し、2002年以降2009年まで10万トン前後の低い水準で推移した。その後、2010年～2014年に比較的良好的な加入が続いたこと、および漁獲圧が低下したことにより資源量は増加し、2014年には100万ト

ンを上回った。その後も良好な加入が続いたことにより資源量はさらに増加して、2020年は321万トンと推定された。

2018年級群(4歳魚)は、加入量が568億尾と推定されており、近年において最も高い値となっている。2021年における3歳魚としての漁獲状況も前年を上回っており、高い豊度を示している。2018年級群の推定残存資源量は、2017年級群の同時期を上回っている。

2019年級群(3歳魚)は、加入量が342億尾と推定されており、近年の高い水準を維持するものの2018年級群を下回る値となっている。2021年における2歳魚としての漁獲状況も、前年を下回った。2019年級群の残存資源量は、2018年級群の同時期を下回っている。

2020年級群(2歳魚)は、加入量が442億尾と推定されており、2019年級群を上回る値となっている。2021年における1歳魚としての漁獲状況は、前年並となっている。2020年級群の残存資源量は、2019年級群の同時期を上回っている。

2021年級群(1歳魚)は、2021年における未成魚としての漁獲状況(主に西日本海域)は、前年を下回っている。沖合域においては、5月～6月の移行域幼稚魚調査(水産資源研究所)では前年を上回る漁獲が見られたが、6月～7月の北西太平洋北上期浮魚類資源調査(水産資源研究所)では前年を下回る漁獲となっている。直近の9月～10月の北西太平洋秋季浮魚類資源調査(水産資源研究所)では、前年並の漁獲が見られた。以上の情報から、現時点では不確実であるが、2021年級群の加入量は前年並の水準と考えられる。

2022年級群(0歳魚)については、現時点ではその水準を予測できない。

2. 来遊量、漁期・漁場、魚体

(1) 北薩～熊野灘(まき網、定置網)

北薩～熊野灘での7月～11月の漁獲量は1.2万トンと前年同期(4.8万トン)を大きく下回った。どの海域においても前年を下回る漁獲となっていた。(漁獲量は各地主要港水揚資料および水揚物標本測定結果等からの推定値)

・来遊量:北薩、薩南海域では、4月まで1歳魚(2021年級群)、5月以降は0歳魚(2022年級群)が漁獲の主体となる。今期の漁獲の主体となる2021年級群の漁獲状況が低調に推移していることから、来遊量は前年を下回ると予測される。

日向灘では、5月まで1歳以上、6月は0歳魚が漁獲の主体となる。今期の漁獲動向の参考となる三重県・高知県・鹿児島県の直近のまき網漁獲量は、現時点で前年を下回っている。よって、今期の来遊量は前年を下回ると予測される。

豊後水道南部西側では、3月まで1歳魚および2歳魚、4月以降0歳魚が漁獲の主体となる。前期のまき網の漁獲量が、特異的に好調であった前年を下回って推移していることから、今期の来遊量は前年を下回ると予測される。

豊後水道南部東側では、0歳魚が漁獲の主体となる。前期の漁獲状況が前年を大きく下回ったことから、今期の来遊量は前年を下回ると予測される。

宿毛湾、土佐湾では、0歳魚および1歳以上が漁獲される。今期主体となる2021年級群の漁獲状況は、

まき網、定置網ともに前年を下回って推移しているため、今期の来遊量は前年並～下回ると予測される。

紀伊水道外域西部では、0歳魚が漁獲の主体となる。本海域においては年間を通じて成魚を漁獲する漁業が少ないため、漁況からの来遊量の予測は難しいが、近年の漁獲傾向から、来遊量は前年並となる。

紀伊水道外域東部では、1歳以上および0歳魚が漁獲される。本海域において、1そうまき網は2017年以降、定置網は2016年以降、低調に推移している。また、潮岬沖での黒潮の離岸傾向が継続した場合、マイワシ漁場の形成条件は悪いと考えられる。以上より、来遊量は低調であった前年並と予測される。

熊野灘では、1歳以上が漁獲の主体となる。本海域における春季の漁獲量とマイワシ太平洋系群の3歳以上の資源量には正の関係が認められている。太平洋系群の3歳以上の資源量は前年を上回ると予測されていることから、今期の3歳以上の来遊量は前年を上回ると考えられる。ただし、房総海域～伊豆諸島海域で大規模な産卵場が形成されると、熊野灘への3歳以上の来遊は少なくなる傾向があり、黒潮大蛇行が継続する今期も同様の状況になる可能性がある。1歳魚および2歳魚については、秋季にまとまった漁獲が見られず、今期の来遊量は低調であった前年並と考えられる。前年同期の来遊量が非常に少なかったことを踏まえ、全体としての来遊量は低調であった前年並～上回ると予測される。

- ・漁期：各海域とも期を通じて漁獲される。
- ・魚体：近年の出現状況から、北薩～豊後水道南部西側では、期前半は15 cm～20 cm 前後の1歳以上、期後半は7 cm～12 cm 前後の0歳魚が主体となる。豊後水道南部東側では、5 cm～10 cm 前後の0歳魚が主体となる。宿毛湾～紀伊水道外域では、14 cm 未満の0歳魚および14 cm 以上の1歳以上が漁獲される。熊野灘では14 cm 以上の1歳以上が漁獲される。

(2) 伊勢・三河湾～相模湾（まき網、定置網、船曳網）

伊勢・三河湾～相模湾での7月～11月の漁獲量は1.5万トンと前年同期（0.8万トン）を上回ったが、伊勢・三河湾でのみ前年を上回る漁獲となっており、駿河湾～相模湾では前年を下回る漁獲となった。

・来遊量：伊勢・三河湾、渥美外海では、0歳魚（2022年級群）が主体となる。マイワシ太平洋系群の資源状態は良好であるが、黒潮A型流路が継続した場合、本海域への来遊は不安定な状況が続くと見込まれ、今期の来遊量は前年並と予測される。

駿河湾、相模湾西部では、期前半は1歳魚（2021年級群）と2歳魚（2020年級群）が主体となり、期後半は0歳魚が主体となる。今期は、南下回遊する産卵親魚が漁獲されると考えられる。マイワシ太平洋系群の親魚量の推定値は前年並であることから、今期の来遊量は前年並と予測される。

相模湾東部では、1歳魚が主体となる。今期主体となる2021年級群は、2020年級群と同様に、近年において比較的高い資源水準と推定されている。そのため、本海域に沖合から来遊しやすい海況（暖水波及等）となった場合は、ある程度の好漁が期待される。ただし前年の漁獲状況が特異的に好調であったことを踏まえ、今期の来遊量は好調であった前年を下回ると予測される。

- ・漁期：伊勢・三河湾は6月以降。渥美外海、駿河湾、相模湾では期を通じて漁獲される。
- ・魚体：近年の出現状況から、伊勢・三河湾、渥美外海では12 cm 以下の0歳魚が主体となる。駿河湾、相模湾西部では、期前半は13 cm～15 cm 前後の1歳魚と16 cm～18 cm 前後の2歳魚が主体となり、期後半は

12 cm 以下の0 歳魚が主体となる。相模湾東部では13 cm～15 cm 前後の1 歳魚が主体となる。

(3) 房総～三陸海域、道東海域（まき網、定置網）

道東沖のまき網漁業は、6 月下旬から操業が始まり10 月まで漁獲が見られ、漁獲量は23.5 万トンと前年同期（24.8 万トン）並であった。房総～三陸海域のまき網漁業は、7 月下旬まで犬吠埼周辺および三陸海域で漁場が形成され、8 月～11 月はわずかに漁獲された程度であった。房総以北の定置網等は、7 月～11 月の漁獲量は1.1 万トンと前年同期（1.5 万トン）を下回っており、宮城、岩手、北海道の定置網では前年を上回る漁獲が見られたが、北海道の棒受網等で前年を下回る漁獲となっていた。

・来遊量：各年級群の資源状態と近年の漁獲状況から、今期の漁獲対象は1 歳魚（2021 年級群）、2 歳魚（2020 年級群）、3 歳魚（2019 年級群）および4 歳魚（2018 年級群）となる。

資源状態を反映し、2 歳以上の来遊量は前年並の高水準になると考えられる。1 歳魚の来遊量は、現時点では不確実であるが、沖合域での調査結果から前年並と考えられる。以上より、全体としての来遊量は前年並と予測される。ただし漁獲量は、まき網の操業状況に左右される。

・漁期・漁場：まき網の漁場は、1 月～6 月は犬吠埼沖～常磐海域で断続的に形成され、6 月以降は三陸海域、6 月下旬には道東海域でも形成される。定置網は、仙台湾～三陸南部海域において、期を通じて入網がみられる。

・魚体：近年および直近の出現状況から、1 歳魚は10 cm～15 cm 前後、2 歳魚は14 cm～17 cm 前後、3 歳魚は16 cm～19 cm 前後、4 歳魚は17 cm 以上。まき網では、1 月は2 歳魚～4 歳魚、2 月は2 歳魚および3 歳魚、3 月以降は2 歳魚～4 歳魚が漁獲される。定置網では、期前半は1 歳魚～4 歳魚、期中盤以降は1 歳魚および2 歳魚が主体となる。

カタクチイワシ太平洋系群等の漁況予報

プレスリリース：引き続き低水準で、全体としては前年並。

今後の見通し（2022年1月～6月）

対象海域：北薩～三陸海域、道東海域

対象漁業：まき網、定置網、船曳網

対象魚群：0歳魚（2022年級群）、1歳魚（2021年級群）、2歳魚（2020年級群）。

年初に加齢。魚体は被鱗体長。

1. 北薩～紀伊水道外域（まき網、定置網）

(1) 来遊量：北薩～薩南海域では前年を下回る。日向灘では前年を上回る。豊後水道南部では前年並。宿毛湾・土佐湾では前年並～上回る。紀伊水道外域ではまとまった漁獲がない。

(2) 漁期：期を通じて漁獲される。

(3) 魚体：12 cm未満の1歳魚主体。

2. 熊野灘～相模湾（まき網、定置網、船曳網）

(1) 来遊量：熊野灘ではほとんど漁獲されない。伊勢・三河湾～駿河湾、相模湾西部では前年並。相模湾東部では前年並～下回る。

(2) 漁期：伊勢・三河湾では6月以降、その他海域では期を通じて漁獲される。

(3) 魚体：伊勢・三河湾では8 cm未満の0歳魚主体、その他海域では8 cm～12 cmの1歳魚主体に、12 cm～14 cmの2歳魚が漁獲される。

3. 房総～三陸海域、道東海域（まき網、定置網）

(1) 来遊量：房総海域では前年を下回る。三陸南部海域では前年並。常磐海域、三陸北部海域ではまとまった漁獲がない。道東海域ではマイワシ来遊量との関係で漁獲される可能性がある。

(2) 漁期・漁場：道東海域、常磐～房総海域の1そうまき網の主な漁獲対象にはならない。三陸海域の定置網は1月で終漁する。房総沿岸海域の2そうまき網は期を通じて散発的に漁獲される。

(3) 魚体：7 cm～11 cmの1歳魚、10 cm～13 cmの2歳魚が漁獲される。

漁況の経過（2021年7月～11月）および見通し（2022年1月～6月）についての説明

1. 資源状態

カタクチイワシ太平洋系群の資源量は、2021年度資源評価において、2002年の291万トンピークに減少傾向に転じ、2020年は14万トンと推定された。本系群は漁場が形成される沿岸域だけでなく、資源状態に応じて黒潮親潮移行域まで広く分布する。

2020年級群（2歳魚）は加入量が207億尾と推定されており、2019年級群の273億尾を下回った。2020年級群の0歳魚および1歳魚としての漁獲量は2019年級群のそれらを下回る水準と推定される。沖合域の調査船調査では、2021年の北西太平洋北上期浮魚類資源量調査（水産資源研究所）における推定1歳以上のCPUEは、引き続き低水準で前年より低かった。北西太平洋秋季浮魚類資源量調査（水産資源研究所、暫定値）における推定1歳以上のCPUEは前年を上回り、2020年同様、東経160°以東の亜寒帯水域

に少ないながらも分布が認められた。また、道東海域における2021年9月の浮魚類漁期中調査（釧路水産試験場）における推定1歳以上の流し網CPUEが2006年以来の高水準となった。以上のことから、2020年級群は依然として低水準ではあるが、沖合域においても分布が認められつつある。

2021年級群（1歳魚）は、2021年7月～11月に東海海域を中心に、カタクチシラスや0歳魚として漁獲され、それらの漁獲量は前年を下回った。沖合域の調査船調査では、2021年の北西太平洋北上期浮魚類資源量調査において、推定0歳魚のCPUEは前年を上回った。北西太平洋秋季浮魚類資源量調査（暫定値）における推定0歳魚のCPUEも前年を上回り、東経160°以東の亜寒帯水域にも分布が認められた。これらのことから、2021年級群は依然として低水準であるが、前年を上回る水準と考えられる。

2022年級群（0歳魚）は、現時点ではその水準を予測できない。

2. 来遊量、漁期・漁場、魚体

(1) 北薩～紀伊水道外域（まき網、定置網）

・来遊量：北薩～薩南海域では、1月～3月に漁獲の主体となる前年春季発生群は低調な漁が続いていることから前年を下回る。

日向灘では、近年、沿岸発生群が漁獲の主体となっている。1月～5月の漁獲量は、前年10月～12月の高知県（宿毛湾）まき網漁獲量と前年8月～12月の宮崎県シラス漁獲量の相乗平均値と正の関係にあり、この指標値が前年を上回ることから、来遊量は前年を上回る。中型まき網による漁獲が本格化する6月の来遊量は現段階では予測が困難である。

豊後水道南部西側では、0歳魚（2022年級群）と1歳魚（2021年級群）が漁獲の主体となる。前年同期の漁は平年比29.7%と不調であり、4月以降に漁獲される0歳魚の来遊水準について現段階では不明だが、カタクチイワシ太平洋系群の資源状態は近年低調であることから、来遊量は前年並。

豊後水道南部東側では、1歳魚が漁獲の主体となる。0歳魚（2021年級群）が主体となった2021年7月～11月におけるカタクチイワシの水揚量は前年並であることから、今期の来遊量は前年並。

宿毛湾・土佐湾では、期を通じて0歳魚、1歳以上が漁獲の対象となる。1月～6月の宿毛湾中型まき網水揚量と前年10月～11月の宿毛湾中型まき網および日向灘まき網の水揚量合計との間には正の関係が見られる。この関係によれば、2021年10月～11月の宿毛湾中型まき網および日向灘まき網の水揚量合計は前年を下回ったものの、2021年1月～6月期は予測を上回って好漁であった。予測式から2022年1月～6月の水揚量は801.7トンであり、前年同期の561.8トンを上回っていることから来遊量は前年並～上回る。

紀伊水道外域では、未成魚・成魚は主たる漁獲対象ではない。

- ・漁期：各海域とも期を通じて漁獲される。
- ・魚体：12 cm未満の1歳魚主体。

(2) 熊野灘～相模湾（まき網、定置網、船曳網）

・来遊量：熊野灘では、ほとんど漁獲されない。

伊勢・三河湾、渥美外海では、カタクチイワシ太平洋系群の資源水準は低水準のため沖合からの来遊は少ないが、内湾の再生産は好調で、秋以降の加入が確認されており、漁期終盤の漁獲が期待できることから、前年並。

駿河湾、相模湾西部では、まき網の漁獲対象になっていないが、相模湾西部の定置網では他魚種に混ざって漁獲される。漁獲対象となる1歳魚（2021年級群）の資源水準は、前年に引き続き非常に低水準と推定されていることから、来遊量は低水準だった前年並。

相模湾東部では、近年の漁獲傾向から、今期も沖合域から来遊する1歳魚を主体に、2歳魚（2020年級群）が僅かに混じると考えられる。今期の漁獲主体と考えられる沖合域における2021年級群の加入状況は2020年級群同様、近年では高い水準にあると推定されている。そのため、沖合から来遊しやすい海況条件となった場合は前年並の漁獲が期待できるものの、そうならなかった場合は前年の漁獲を下回ることも考えられる。よって、来遊量は前年並～下回る。

- ・漁期：伊勢・三河湾では6月以降、その他海域では期を通じて漁獲される。
- ・魚体：伊勢・三河湾では8cm未満の0歳魚主体、その他海域では8cm～12cmの1歳魚主体に、12cm～14cmの2歳魚がわずかに混じる。

(3) 房総～三陸海域、道東海域（まき網、定置網）

・来遊量：房総海域では、1歳魚（2021年級群）主体に2歳魚（2020年級群）が混じる。2020年級群は2021年9月に釧路水産試験場による道東海域における浮魚類漁期中調査、12月に三陸南部海域および房総海域でも漁獲がみられた。水産資源研究所による北西太平洋秋季浮魚類資源量調査においても、資源量全体が低水準な近年の中では分布量が多いことが確認されている。そのため、今期の2歳魚の来遊量は、低水準ながらも、ほとんど来遊がなかった前年を上回る。2021年級群は、0歳魚を漁獲対象とする秋季房総沿岸海域における2そうまき網の2021年漁獲量が2020年を下回ったため、今期の1歳魚の来遊量は前年を下回る。全体としての来遊量は、漁獲主体となる1歳魚の来遊量を反映し、前年を下回る。

常磐海域では、近年、予測期間中の漁場形成は極めて散発的であり、ほとんど漁獲はない。

三陸南部海域の定置網では、1月に1歳魚および2歳魚主体に入網があり、来遊量は前年並。2月以降は近年の傾向から、ほとんど水揚げされない。

三陸北部海域では、漁業情報から判断して、まとまった漁獲がない。

道東海域では、2021年9月以降の浮魚類漁期中調査およびサンマ南下期調査（釧路水産試験場）の結果によれば本種の来遊量が増加傾向にあるため、予測期間内に来遊する可能性はある。一方、マイワシの来遊量が2021年と同程度であった場合、まき網船はマイワシを対象とした漁獲を行うと考えられるため、本種の漁獲が行われるかは不明である。

・漁期・漁場：資源量が多い年には、常磐～房総海域の1そうまき網では12月以降に漁場が形成されていたが、資源量の少ない近年は主な漁獲対象にはならない。三陸海域の定置網は1月で終漁する。房総沿岸海域の2そうまき網は期を通じて散発的に漁獲される。

- ・魚体：7cm～11cmの1歳魚を主体に、10cm～13cmの2歳魚も漁獲される。

ウルメイワシ太平洋系群等の漁況予報

プレスリリース：全体として前年並

今後の見通し（2022年1月～6月）

対象海域：北薩～熊野灘

対象漁業：まき網、定置網、棒受網、多鈎釣

対象魚群：0歳魚（2022年級群）、1歳（2021年級群）以上。年初に加齢。魚体は被鱗体長。

(1) 来遊量：北薩～薩南海域は前年並。日向灘では前年を下回る。豊後水道南部西側では前年並～上回る。豊後水道南部東側では前年を上回る。宿毛湾・土佐湾では前年並～上回る。紀伊水道外域は前年並。熊野灘では前年並～下回る。全体としては前年並。

(2) 漁期：期を通じて漁獲される。

(3) 魚体：前半は1歳魚（15 cm～20 cm）が主体であり、後半に0歳魚（10 cm以下）が加入する。

漁況経過（2021年7月～11月）および見通し（2022年1月～6月）についての説明

1. 資源状態

本系群の資源状態について、太平洋および瀬戸内海における漁獲量（農林統計）と、卵稚仔調査で得られる卵密度データを標準化した資源量指標値（平均値を1とする相対値）により評価した。漁獲量は、2015年に4.9万トンと過去最高となったが、2016年以降は減少し、2020年は2.1万トンとなった。1979年以降の卵稚仔調査に基づいて求めた資源量指標値は、2016年に1.89と過去最高となり、2017年～2019年はやや減少したものの1.36～1.58と比較的高い水準で推移したが、2020年は0.82と減少した。以上のことから資源は減少傾向にある。

2. 来遊量、漁期・漁場、魚体

2022年前期（1月～6月）は1歳魚（2021年級群）主体の漁況になることが推測されるため、2021年後期（7月～11月）の漁況等から、1歳魚の来遊量を予測した。2022年前期（1月～6月）の後半には0歳魚（2022年級群）が加入するが、現時点での予測は困難である。

予測対象海域に相当する鹿児島県～三重県の主要港における前期（1月～6月）水揚量と後期（8月～12月）水揚量には、強い正の関係がある。一方、後期（7月～11月）水揚量と翌年前期（1月～6月）水揚量にも、弱いながらも統計的には有意な正の関係がある。2021年後期（7月～11月）の水揚量は27千トンであった。2000年～2020年の後期（7月～11月）水揚量と翌年前期（1月～6月）水揚量の間関係を用いて、2022年前期（1月～6月）の水揚量は11千トンと予測された。これは2021年前期（1月～6月）の107%に相当する。よって、2022年前期（1月～6月）の来遊量は海域全体としては前年並となる。

北薩および薩南海域では、1月～4月は1歳魚（2021年級群、15 cm～20 cm）主体で、5月～6月は0歳魚（2022年級群、5 cm～10 cm）が主体となる。前期の漁況から、今期の来遊量は前年並と予測される。

日向灘では、1月～4月は1歳以上（2021年級群以上、15 cm～20 cm以上）、6月は0歳魚（2022年級群）が主体となる。1月～4月に主体となる1歳（2021年級群）以上の漁況は、鹿児島県主要4港の前年10月～12月の漁況と関係性がみられている。2021年11月時点で鹿児島県漁獲量から求めた指標値は前年の本県の漁獲量を下回っていることから、今期の来遊量は前年を下回ると予測される。

豊後水道南部西側では、1月～3月は1歳魚（2021年級群、15 cm～20 cm）、4月～6月は0歳魚（2022年級群、10 cm前後）が主体となる。2021年7月～11月は0歳魚（2021年級群）が多く漁獲されてい

た。2022年はこれらの個体が1歳魚となり2021年と同等あるいは2021年より多く漁獲される可能性があることから、今期の来遊量は前年並～上回ると予測される。

豊後水道南部東側では、今期は0歳魚(2022年級群)が漁獲の主体となる。これらの個体の産卵親魚になり得る前期の0歳魚(2021年級群)および1歳魚(2020年級群)の水揚量は前年同期を上回ったことから、今期の来遊量は前年を上回ると予測される。

宿毛湾および土佐湾では、宿毛湾中型まき網が漁獲の中心である。宿毛湾中型まき網における1月～6月の水揚量と8月～12月期の水揚量には有意な正の相関がみられ、関係式から予測される2022年1月～6月の水揚量は1,899.2トンと前年(1,742トン)よりやや多いことから、今期の来遊量は前年並か上回ると予測される。

紀伊水道外域西部では、近年の漁獲が低調に推移していることから、今期の来遊量も前年並に低いと予測される。

紀伊水道外域東部では、1そうまき網および棒受網による漁獲量は2016年以降減少している。熊野灘南部における定置網および潮岬周辺における棒受網による漁獲量は、総じて減少傾向である。また、黒潮が潮岬で離岸のまま推移した場合、ウルメイワシの漁場形成条件は悪いと考えられる。これらのことから、今期の来遊量は前年並と予測される。

熊野灘では1歳魚(2021年級群、11cm～20cm)および2歳以上(2020年級群、20cm以上)が主体となる。近年の熊野灘では冬春季に成魚の産卵回遊がみられず、低調な漁況が続いている。2020年冬春季には体長22cm～24cmの推定2歳以上が漁獲主体となったが、2021年冬春季はマサバの漁況が好調だったこともあり、ほとんど漁獲されなかった。今期の2歳(2020年級群)以上の来遊量は前年の漁況から判断することはできないが、2017年級群以降の漁況が低調となっていることから、低調であった前年並と予測される。一方、一部が産卵に加わると予想される明け1歳魚(2021年級群)は、前期の漁況から前年を下回ると予測される。以上から、今期の来遊量は前年並～下回ると予測される。なお、熊野灘ではウルメイワシは積極的に漁獲されないため、漁獲が来遊を反映しない可能性もある。

マアジ太平洋系群等の漁況予報

プレスリリース：海域により異なるが、全体としては前年並

今後の見通し（2022年1月～6月）

対象海域：北薩～熊野灘、相模湾

対象漁業：まき網、定置網

対象魚群：0歳魚（2022年級群）、1歳魚（2021年級群）、
2歳魚（2020年級群）、3歳（2019年級群）以上。
年初に加齢、魚体は尾叉長。

1. 北薩～土佐湾（まき網、定置網）

(1) 来遊量：北薩～薩南海域では好調であった前年を下回る。日向灘では前年を下回る。豊後水道南部では前年並～上回り、宿毛湾・土佐湾では前年を上回る。

(2) 魚体：北薩～薩南海域では1歳魚～3歳魚主体、日向灘、豊後水道南部では1歳魚主体、宿毛湾・土佐湾では0歳魚～1歳魚主体。0歳魚は14 cm以下、1歳魚は14 cm～20 cm、2歳以上は20 cm以上。

2. 紀伊水道外域～熊野灘（まき網、定置網）

(1) 来遊量：紀伊水道外域では前年並。熊野灘では前年を下回る。

(2) 魚体：紀伊水道外域東部では1歳魚～3歳魚主体、熊野灘では1歳魚主体。0歳魚は12 cm以下、1歳魚は14 cm～21 cm、2歳以上は21 cm以上。

3. 相模湾（定置網）

(1) 来遊量：前年を上回る。

(2) 魚体：主体となる1歳魚は16 cm～22 cm。

漁況の経過（2021年7月～11月）および見通し（2022年1月～6月）についての説明

1. 資源状態

資源量は1986年以降増加し、1990年代半ばは15万トン～16万トンと高い水準で推移したが、1997年以降減少した。2009年～2013年は横ばいで推移したが、その後再び減少している。加入量は1993年をピークに減少し、2009年以降2.6億尾～7.1億尾と低い水準で推移している。2021年度の資源評価において、2020年の資源量は3.3万トン、親魚量が1.7万トンと推定された。

2019年級群（3歳魚）の加入量は2.6億尾と推定され、2021年後半の漁獲は低調に推移しており、残存資源量は少ない。

2020年級群（2歳魚）の加入量は2.8億尾と推定された。低水準ながら2021年前半の漁獲の主体となったが、2021年後半の漁獲は低調に推移しており、残存資源量は少ないと考えられる。

2021年級群（1歳魚）は、いずれの海域でも漁獲対象になる。現状での各県地先の加入量の指標値は、宇和島港まき網、宿毛湾まき網、串本棒受網、千葉県定置網において前年を上回っており、伊勢湾小型底びき網（まめ板）では前年並、宮崎県南部定置網（4月～6月）では前年を下回った。4月～11月の指標値の相乗平均は2020年級群を上回ることから、2021年級群の加入量は2020年級群を上回ると考えられる。

2022年級群（0歳魚）は期後半から漁獲されると考えられるが、現時点での予測は困難である。

2. 来遊量、漁期・漁場

本魚種は予測期間を通じて漁獲対象となる。来遊量については、海域ごとに、前期の漁況に基づき予測した。年齢別体長は、これまでの体長組成の推移から概ね次のとおりである。0歳魚：14 cm以下、1歳魚：15 cm～20 cm、2歳魚：21 cm～24 cm、3歳以上：25 cm以上。3歳以上の年齢に対応した体長区分は現状

では困難である。

(1) 北薩～土佐湾

北薩～薩南海域では、1歳魚～3歳魚（2021年級群～2019年級群、尾叉長：20～27cm）が主体となる。1月～6月の漁獲量は、前年11月の漁獲量と正の関係が認められることから、今期の来遊量は好調であった前年を下回ると予測される。

日向灘では、1歳魚が漁獲の主体となる。日向灘のまき網は、前年7月～12月漁獲量と高知県（宿毛湾）前年7月～11月まき網漁獲量の相乗平均値により漁獲動向を判断している。11月までの指標値が前年の宮崎県の漁獲量を下回ることから、日向灘における2022年1月～6月の漁獲量は前年を下回ると予測される。

豊後水道南部西側では、1歳魚が漁獲の主体となる。2021年11月以降に1歳魚の漁獲が急増しており、年明けも漁獲対象となる可能性がある。一方でマアジ太平洋系群の加入量は低調な状況が継続していることを考慮すると、低調であった前年並と予測される。

豊後水道南部東側では、1歳魚が漁獲の主体で、0歳魚も混じる。2022年に1歳魚となるゼンゴ（当歳魚）の水揚量が2021年7月～11月に前年を上回ったことから、2022年1月～6月の水揚量も前年を上回る予測される。

宿毛湾・土佐湾では、0歳魚と1歳魚が主体となる。宿毛湾まき網の前年7月～11月漁獲量と1月～6月漁獲量には正の相関関係が認められる。この関係から、2021年7月～11月の漁獲量から2022年1月～6月の漁獲量を予測すると前年を上回ると予測される。

(2) 紀伊水道外域～熊野灘

紀伊水道外域西部では、2021年7月～11月の漁獲量は前年を上回った。2022年1月～6月期の来遊は、近年の漁獲動向から、前年並と予測される。

紀伊水道外域東部では、1歳魚～3歳魚（2021年級群～2019年級群）が漁獲の主体となる。今後も潮岬沖で黒潮が離岸傾向で推移すると予測され、来遊および漁場形成条件は2018年～2021年と類似する可能性が高いため、2022年1月～6月期の来遊は前年並みで平年を下回ると予測される。

熊野灘では、2021年7月～11月の漁況では定置網で漁獲される0歳魚は前年を下回っており、今期主体となる1歳魚は前年を下回ると考えられる。まき網の漁況は前年を下回っており、調査開始以降最も少なくなった。2歳以上は少ない。以上を総合して考えると前年を下回ると予測される。

(3) 相模湾

伊豆東岸では、1歳魚が漁獲の主体となる。2005年～2020年4月～11月の0歳魚推定漁獲尾数と翌年1月～6月の1歳魚以上の漁獲尾数との間には正の相関関係がみられ、この関係式に2021年4月～11月の0歳魚推定漁獲尾数を代入すると、2022年1月～6月の1歳魚の漁獲尾数は前年を上回ると予測される。但し、2011年以降の全てのプロットが回帰直線の下側に位置しており、系群全体の資源量および伊豆東岸大型定置網漁獲量は低調に推移していることから、前年を大きく上回るとは無いと考えられる。

西湘地区では、1歳魚が漁獲の主体となる。2021年7月～11月のジンダ漁獲量は低い水準ではあるが前年を上回ったことから、2022年1月～6月のマアジ漁獲は前年を上回ると予測される。

(4) 房総～三陸海域の漁獲情報

房総～鹿島灘海域における北部まき網の2021年7月～11月の漁獲量は1,103トンとなり、前年同期1,519トンを下回ったが、平年（過去5か年平均1,048トン）並であった。仙台湾～三陸海域では、宮城県の2021年7月～11月の漁獲量は387トンで前年を下回った。岩手県主要6市場の2021年7月～11月の定置網による漁獲量は226トンで前年を上回った。青森県では2021年7月～11月の八戸の漁獲量は5トンで前年を下回り、平館の定置網による漁獲量は6トンで前年を大きく下回った。

マサバおよびゴマサバ太平洋系群等の漁況予報

今後の見通し（2022年1月～6月）

対象海域：北薩～三陸海域

対象漁業：まき網、定置網、棒受網、たもすくい等

対象魚群：1歳魚（2021年級群）、2歳魚（2020年級群）、3歳魚（2019年級群）、
4歳魚（2018年級群）、5歳魚（2017年級群）、6歳（2016年級群）以上。
年初に加齢。魚体は尾叉長。

1. 北薩～日向灘～豊後水道南部～土佐湾（まき網、定置網等）

(1) 来遊量：マサバは北薩～薩南海域では前年を下回り、日向灘～豊後水道南部西側では前年並～上回り、豊後水道南部東側では前年を下回る。ゴマサバは北薩～薩南海域では前年を上回り、日向灘～豊後水道南部では混獲される程度、土佐湾では前年を下回る。サバ類全体としては前年並。

(2) 漁期：期を通じて漁獲される。

(3) 魚体：マサバは28 cm～38 cm（4歳以上）主体。ゴマサバは北薩～薩南海域では27 cm～38 cm（3歳魚～6歳魚）主体。日向灘～豊後水道南部では25 cm～33 cm（1歳魚、2歳魚）主体、土佐湾では31 cm～38 cm（3歳魚～5歳魚）主体。

2. 紀伊水道外域（まき網、定置網）

(1) 来遊量：マサバは前年並。ゴマサバは前年並。サバ類全体としては前年並。

(2) 漁期：期を通じて漁獲される。

(3) 魚体：マサバは28 cm～36 cm（2歳魚～4歳魚）主体、ゴマサバは28 cm～36 cm（2歳魚～4歳魚）主体。

3. 熊野灘（まき網、定置網）

(1) 来遊量：マサバは前年を上回る。ゴマサバは前年並～下回る。サバ類全体としては前年を上回る。

(2) 漁期：期を通じて漁獲される。

(3) 魚体：マサバは28 cm～40 cm（4歳以上）主体に20 cm～32 cm（3歳以下）も漁獲される。ゴマサバは30 cm～40 cm（2歳以上）主体に漁獲される。

4. 伊豆諸島周辺海域（棒受網、たもすくい）

(1) 来遊量：マサバ3歳魚は前年を下回る。4歳魚は前年を上回る。5歳魚は前年並。6歳以上は前年を上回る。マサバ全体としては前年並。ゴマサバは前年を下回る。サバ類全体としては前年並。

(2) 漁期・漁場：マサバは漁期当初は伊豆諸島北部海域および三宅島周辺海域が主漁場となり、盛漁期には銭洲周辺海域にも漁場が形成される。期後半は伊豆諸島北部海域が主漁場となる。ゴマサバは期を通じて伊豆諸島北部海域が主漁場となり、銭洲周辺海域および三宅島周辺海域にも漁場が形成される。

(3) 魚体：マサバは29 cm～40 cm（4歳以上）主体に漁獲される。ゴマサバは26 cm～33 cm（2歳魚）主体に26 cm以下（1歳魚）および29 cm～38 cm（3歳以上）も漁獲される。

5. 犬吠～三陸海域（まき網、定置網、底曳網）

(1) 来遊量：マサバ1歳魚は前年を下回る。2歳魚は前年を上回る。3歳魚は前年を下回る。4歳魚は前年を上回る。5歳魚は前年並。6歳以上は前年を上回る。マサバ全体としては前年並。ゴマサバは混獲される程度。サバ類全体としては前年並。

(2) 漁期・漁場：まき網では期を通じて犬吠～常磐南部海域が主漁場となり、期後半には三陸南部海域にも漁場が形成される。三陸海域の定置網では1月および4月以降に漁獲される。三陸海域の底曳網では期を通じて漁獲される。

(3) 魚体：マサバは、28 cm～37 cm（4歳以上）主体に、2月以降は22 cm～31 cm（3歳以下）の割合が増加する。

漁況の経過（2021年7月～11月）および見通し（2022年1月～6月）についての説明

1. 資源状態

1) マサバ

資源量は1990年代～2000年代前半に極めて低い水準にあったが、2013年以降の加入量水準の高い年級群の発生により増加傾向を示し、2018～2020年の資源量は、資源量を推定している1970年以降で最高水準となっている。2013年級群以降、成長および成熟の遅れがみられている。

2015年級群（7歳魚）以上の残存資源量は最近10年（以下、近年）としては多い。

2016年級群（6歳魚）は、2021年11月時点の資源評価（コホート解析）による推定加入量が99億尾と近年の平均（107億尾）程度の水準である。

2017年級群（5歳魚）は、推定加入量が82億尾と近年の平均を下回る水準である。

2018年級群（4歳魚）は、推定加入量が214億尾と卓越して高い水準であるが、これまでの各地漁業の漁況では、推定加入量が262億尾と卓越して高い2013年級群の同時期の漁獲量を大きく下回っており、加入量の見積もりの不確実性は依然として高い。

2019年級群（3歳魚）は、推定加入量が53億尾と近年の平均を下回る水準である。

2020年級群（2歳魚）は、推定加入量が144億尾と近年の平均を上回る水準である。

2021年級群（1歳魚）の加入量は、北西太平洋北上期浮魚類資源調査（水産資源研究所、6月～7月）、北西太平洋秋季浮魚類資源調査（水産資源研究所、9月～10月）および再生産関係から、近年の平均程度の水準と推定されている。

2) ゴマサバ

資源量は2004年～2011年に高い水準にあったが、2011年以降、減少傾向を示し、2020年の資源量は、資源量を推定している1995年以降で最低水準となっている。

2017年級群（5歳魚）は、2021年11月時点の資源評価（コホート解析）による推定加入量が2.8億尾と近年の平均（4.5億尾）を下回る水準であり、残存資源量は高齢となって少なくなっている。

2018年級群（4歳魚）は、推定加入量が2.4億尾と近年の平均を下回る水準である。

2019年級群（3歳魚）は、推定加入量が2.0億尾と近年の平均を下回る水準である。

2020年級群（2歳魚）は、推定加入量が1.5億尾と近年の平均を大きく下回る水準である。

2021年級群（1歳魚）の加入量は、再生産関係から近年の平均を下回る水準と推定されているが、2021年級群を対象とした直近の漁況が極めて低調に推移していることから、加入量の見積もりの不確実性は高い。

2. 来遊量、漁期・漁場、魚体

1) マサバ

(1) 来遊量

資源状態を基にすると、1歳魚（2021年級群）は、加入量が近年の平均程度の水準と考えられ、来遊量は前年を下回る。2歳魚（2020年級群）は、加入量が近年の平均を上回る水準であり、来遊量は前年を上回る。3歳魚（2019年級群）は、加入量が近年の平均を下回る水準であり、来遊量は前年を下回る。4歳魚（2018年級群）は、加入量が卓越して高い水準であり、来遊量は前年を上回る。5歳魚（2017年級群）は、加入量が近年の平均を下回る水準であり、来遊量は前年並。6歳魚（2016年級群）は、加入量が近年の平均程度の水準であり、来遊量は前年を上回る。7歳（2015年級群）以上の来遊量は前年を上回る。マサバの来遊量は前年並となる海域が多く、全体としては前年並となる。

(2) 漁期・漁場、魚体

犬吠以北海域でのまき網漁業では、8月と10月に八戸沖でややまとまった漁獲がみられたが、7月～10月は低調に推移した。道東沖では10月にわずかに漁獲された程度であった。11月は八戸沖～犬吠海域で漁場が形成されたが低調に推移した。7月～11月の漁獲量は、犬吠以北海域におけるまき網では2.2万トンと前年同期(2.8万トン)を下回り、千葉県以北の定置網・底曳網等では1.5万トンと前年同期(1.0万トン)を上回り、伊豆諸島以西の海域では6.5千トンと前年同期(11.6千トン)を下回った。(漁獲量は各地主要港水揚資料および水揚物標本測定結果等からの推定値)

本予測期間における各地の漁期・漁場および魚体は以下のとおり。犬吠以北海域のまき網では、期を通じて犬吠～常磐南部海域が主漁場となり、期後半には三陸南部海域にも漁場が形成される。4歳以上が主体に漁獲され、2月以降は3歳以下の割合が増加する。三陸海域の定置網では、1月および4月以降に漁獲される。三陸海域の底曳網では期を通じて漁獲される。伊豆諸島周辺海域では、4歳以上が主体に漁獲される。漁場形成は黒潮流路変動に強く影響される。黒潮流路はA型で推移し、銭洲周辺、三宅島付近を流れると予測されており、漁期当初には伊豆諸島北部海域および三宅島周辺海域に漁場が形成される。盛漁期には銭洲周辺海域にも漁場が形成される。期後半の漁場は伊豆諸島北部海域となる。熊野灘以西では昨年同様にマサバ主体の漁場形成がみられ、4歳以上が主体に漁獲される。

年齢別尾叉長は、これまでの体長組成の推移、年齢査定の結果から概ね次のとおりである。1歳魚(2021年級群):26cm以下、2歳魚(2020年級群):21cm～30cm、3歳魚(2019年級群):25cm～32cm、4歳魚(2018年級群):27cm～34cm、5歳魚(2017年級群):29cm～35cm、6歳(2016年級群)以上:31cm以上。(各年級群の体長の範囲は広く重なり合っている)

2) ゴマサバ

(1) 来遊量

資源状態を基にすると、1歳魚(2021年級群)は、加入量が近年の平均を下回る水準と考えられ、来遊量は低調であった前年を上回る。2歳魚(2020年級群)は、加入量が近年の平均を大きく下回る水準であり、来遊量は前年を下回る。3歳魚(2019年級群)は、加入量が近年の平均を下回る水準であり、来遊量は低調であった前年並となる。4歳(2018年級群)以上は残存資源量が少なくなっている。ゴマサバの来遊量は、北薩～薩南海域では前年を上回るものの、日向灘～豊後水道南部では混獲される程度、土佐湾～伊豆諸島周辺海域では前年並～下回り、犬吠以北海域では混獲される程度となるなど、低調であった前年並～下回る海域が多く、全体としては低水準となる。

(2) 漁期・漁場、魚体

7月～11月の漁獲量は、北薩～紀伊水道外域では3.8千トンと前年同期(3.4千トン)並、熊野灘では7.4百トンと前年同期(4.2百トン)を上回り、伊豆諸島周辺海域では3.1千トンと前年同期(3.5千トン)並、犬吠以北海域のまき網では0.5千トンと前年同期(3.7千トン)を下回り、千葉県以北の定置網・底曳網等では7.1千トンと前年同期(10.2千トン)を下回った。

本予測期間における各地の漁期・漁場および魚体は、北薩～薩南海域では3歳魚～6歳魚主体、日向灘～豊後水道南部では1歳魚、2歳魚主体、土佐湾では3歳魚～5歳魚主体、紀伊水道外域では2歳魚～4歳魚主体、熊野灘では2歳以上主体に、期を通じて漁場が形成される。伊豆諸島周辺海域では2歳魚主体に1歳魚および3歳以上も混じり、期を通じて伊豆諸島北部海域が主漁場となり、黒潮流路によって一時的に銭洲周辺海域および三宅島周辺海域にも漁場が形成される。

年齢別尾叉長は、これまでの体長組成の推移、年齢査定の結果から概ね次のとおりである。1歳魚(2021年級群):30cm以下、2歳魚(2020年級群):24cm～33cm、3歳魚(2019年級群):29cm～37cm、4歳魚(2018年級群):32cm～38cm、5歳(2017年級群)以上:33cm以上。(各年級群の体長の範囲は広く重なり合っている)

参 画 機 関

地方独立行政法人 北海道立総合研究機構 水産研究本部 釧路水産試験場 函館水産試験場	和歌山県水産試験場
地方独立行政法人 青森県産業技術センター 水産総合研究所	徳島県立農林水産総合技術支援センター 水産研究課
岩手県水産技術センター	高知県水産試験場
宮城県水産技術総合センター	愛媛県農林水産研究所 水産研究センター
福島県水産海洋研究センター	大分県農林水産研究指導センター 水産研究部
茨城県水産試験場	宮崎県水産試験場
千葉県水産総合研究センター	鹿児島県水産技術開発センター
東京都島しょ農林水産総合センター	地方独立行政法人 大阪府立環境農林水産総合研究所 水産研究部 水産技術センター
神奈川県水産技術センター	一般社団法人 漁業情報サービスセンター
静岡県水産・海洋技術研究所	(取りまとめ機関) 国立研究開発法人 水産研究・教育機構 水産資源研究所
愛知県水産試験場 漁業生産研究所	
三重県水産研究所	